オレリエン・ハンクーの スイスへの誘い

血液型のお話

日本にいると、「オレリエンさん、何型ですか？」と聞かれたり、「こういうなら、□型でしょう」、「それって、△型っぽくない？」と言われたりします。最初は何の話かさっぱり分かりませんでしたが、血液型についてだったと知った所で、私はどう反応すればいいかわかりませんでした。なぜなら、自分の血液型を知らなかったし、それぞれの持つ意味も知らなかったからです。ほとんどの外国人は同じようですし、医療以外で自分の血液型を知る必要がないと思っていますし、万一必要となったときにすぐ調べられるものですから、そもそも知っておく必要もまったくないと思っています。

一方、日本では、ご存知のように血液型によって性格が分類されていますし、「お元気ですか、今日いい天気ですね」みたいな世間話をするような感じで相手の血液型が聞けるということから考えれば、血液型の話は日本人の中で相当定着して、大事な情報だと思うようになり、一応答えるようにする必要がありました。親に聞いても知らないだろうと思い、高校時代に学んだことを思い出して自分の血液型を推理してみました。たしかに、高校のときの生物学の授業で「O型は普遍的な血液型だ」と覚えていましたから、「普遍的」を「世界中に一番多い」と間違った意味で取ってしまい、自分がO型だと思い込んでしまいました。しかし、私の推理に大きな落とし穴があって、この間日本に来た母と血液型の話になって、「私はO型ですね？」と確認してみると、「何言っているの、あなたはお父さんとお母さんと同じB型だよ！」とあっさり言われました。今まで実際の血液型を知らなかったことと、友達などにずっと「私は大雑把なO型だよ」と嘘をつくつもりなくとも、嘘をついてきたとのダブル・ショックを受けました。そして、人に「実はB型だった…」と言って、その人はちょっと戸惑って「やっぱりそうだった！ずっとB型だと思っていたもの」と開き直ったりするのではないかと、人の見る目が変わるのではないかと、血液型性格分類にちょっと恐ろしい場面があります。一体何で、血液型によって性格や人との相性が決めつけられるようになったのかなと思って、今回血液型について調べました。

どうやら、性格と血液型が結ばれているのは日本だけのようで、そこから話します。日本で初めて血液型が研究されたのは1916年でしたが、その結果が学界だけではなく一般的な注目を浴びるようになったのは1927年、古川竹二の研究発表でした。そして1932年に『血液型と気質』という論文の発表とともに、旧日本陸軍において実際に血液型によって兵隊を分類しようという企画がありましたが、戦争が始まって実現されませんでした。血液型と性格をめぐる話が復活したのは1971年に発表された『血液型でわかる相性』でした。著者は古川先生の教え子の弟、能見正比古でした。70年代から今日に至って、学界では血液型性格分類の正当性が論じられていますが、一般人の間には完全に定着しているのが現状です。

日本での話からすれば、人間は自分や相手の血液型が分かるのが当然なことに見えますが、その技術は実際にそう古くはありません。したがって、血液型と深く関わっている輸血の歴史を一緒に紹介します。史上初の輸血は1667年で、羊と人の間でした。今思えば無茶な行為で、当時の輸血が成功したのは奇跡に近いものです。初めて人間同士の輸血が成功したのは1818年でしたが、失敗が多くて、患者の命にかかる危険な技術とされ、禁止されたりしました。1860年から血液の分析が行われ、血小板が判明され、1874年に異種輸血は死に至ることが判明されました。しかし、輸血が成功した理由はまだ判明されていませんでした。1900年に、オーストリアのカール・ラントシュタイナー博士が4種類の血液型を判明し、それぞれをA・O・B・ABと名付けて、『ABO式』という血液型を分ける方式を練りだしました。同博士は1907年に同じ血液型同士の輸血を推薦し、O型が相手の血液型を問わず輸血に使える血液だと、いわゆる「普遍的なドナー」を判明しました。結局、血液型が判明されたことで確実に成功する輸血ができるようになりました。「同じ血液型同士の輸血」とありましたが、それは「お互いの血液型が合う」同様、ちなみに「相性がいい」という捉え方ができるのではないでしょうか。おそらく、その時代の日本側の先生方がそういうふうに捉えたのではないかと私は思います。1920年代は心理学の黄金時代、人間の性格やタイプをあらゆるファクターで分類しようとした全盛期でした。そして、それを判明しようと一生懸命になって、結果は血液型性格分類ではないかと察しています。

ところで、1940年にラントシュタイナー博士は血液型だけではなく、血液型をRh因子によってさらに区別しました。Rhとは、実験に使用されたアカゲザル（Rhesus monkey）の頭文字です。簡単に言いますと、RhはD抗原の有無で、陽性（＋）と陰性（－）で表記されます。D抗原を持たないRh－型の人にRh＋型の血液を輸血すると、血液の凝集、溶血等のショックを起こす可能性があります。どちらかといえば、Rh－のほうが著しく少ないのは確かですが、血液型性格分類において、Rhはまったく関係のない要素となっているようです。それは怪しいと思いませんか。さらに調べてみたところで、各人種（あるいは国民）において血液型の割合があるようです。では、日本人の血液型の分配を見てみましょう。A型は40%、O型は30%、 B型は20%とAB型は10%です。ちょうどバランスのいい割合で、真面目とされるA型がやや多くて、真面目さは日本で高く評価されるゆえに性格分類が定着しやすい環境と思います。つづいて、スイスでの血液型の分配を見てみましょう。A型は47%、O型は41%、B型は8%とAB型は4%です。A型とO型が比較的に多くて、性格分類に無理があると感じ始めます。インドの場合、B型はなんと人口の80%を占めているそうで、10人中に8人が同じ性格であると私は思えません。

血液型で人間の性格を分類、評価するかしないかは結局個人の問題ですけど、血液型で配属を判断する会社や子供の結婚相手を選ぶ両親という、血液型をめぐっての差別的な使い方は心配です。

これだけ覚えておきましょう。血液には科学的に次の4つの働きしかありません。1）体中に酸素と栄養、また炭酸ガスと老廃物を運ぶこと、2）体をウィルスや細菌から守ること、3）出血を止めること、4）体温を維持すること。では、次回もお楽しみに！